

評価問題例

「活用」の力を育てる評価の視点
 叙述や表現を根拠にして、自分の考えを整理して考えたり、書いたりする問題。

① 次の二つの文をくらべて、書き方のちがいを感じたことや、気付いたことを説明しなさい。

- ① ぼくは、川をはなれ、再び森の中へ入ってゆきました。
- ② ぼくは、川をそつとはなれ、再び森の中へ入ってゆきました。

〔解答例〕

①では、筆者が川をはなれたことは分かるが、そのときの様子や気持ちが伝わってこない。②では、「そつと」という言葉があるので、「クマに見つからないように」という気持ちや、「音をさせないようにそろそろ」となど、筆者の様子を想像することができる。

②

⑤の場面で、文章の書き方（表現）について、あなたが気付いたり、考えたりしたことを書きなさい。

〔解答例〕

段落のはじめに「不思議な光景に出会いました。」と書かれているから、読んでいて「なにが不思議なのだろう。早く次を読みたい。」と思った。読む人を引きつける方法だと思った。

評価問題のポイント

本時の学習で行った言語活動について、身に付けることができたかを問う問題である。

①は、修飾語の効果を取り上げている。児童にとって、修飾表現は、低学年から学習を重ねてきており、表現の工夫としてとらえやすいと考えられる。

まず、「そつと」が「はなれ」を修飾していることを理解した上で、「しずかに」「ゆっくりした動作で」など外見上の様子に加え、「注意深く」「音を立たないように」「気付かれないように」など、人物の心情を理解する手がかりになることにも気付く必要がある。このような意味の理解の上に立って、「そつと」を入れることが様子や心情を伝える効果があることを理解させるようにする。

解答に当たっては、「二つの文をくらべて」という条件を見落とさないように注意し、「①では、……。②では、……。」のような文型に整えることが求められる。努力を要する状況への手立てとしては、①と②の違いを見つけさせることや、動作化するなどして「そつと」の意味や語感をとらえさせることが考えられる。また、解答の文型を与えることも有効な手立てと考えられる。

②は、本時の学習内容の定着状況を見る問題である。自由記述の形式であるため、書き方についてとまどう児童がいることが予想される。その際には、ノートに書いた「ふりかえり」を読み返すなどして、内容や文章例を思い起こすようにさせる。また、児童が学習内容を明確にとらえられるように、毎時間の振り返りを充実させることが求められる。